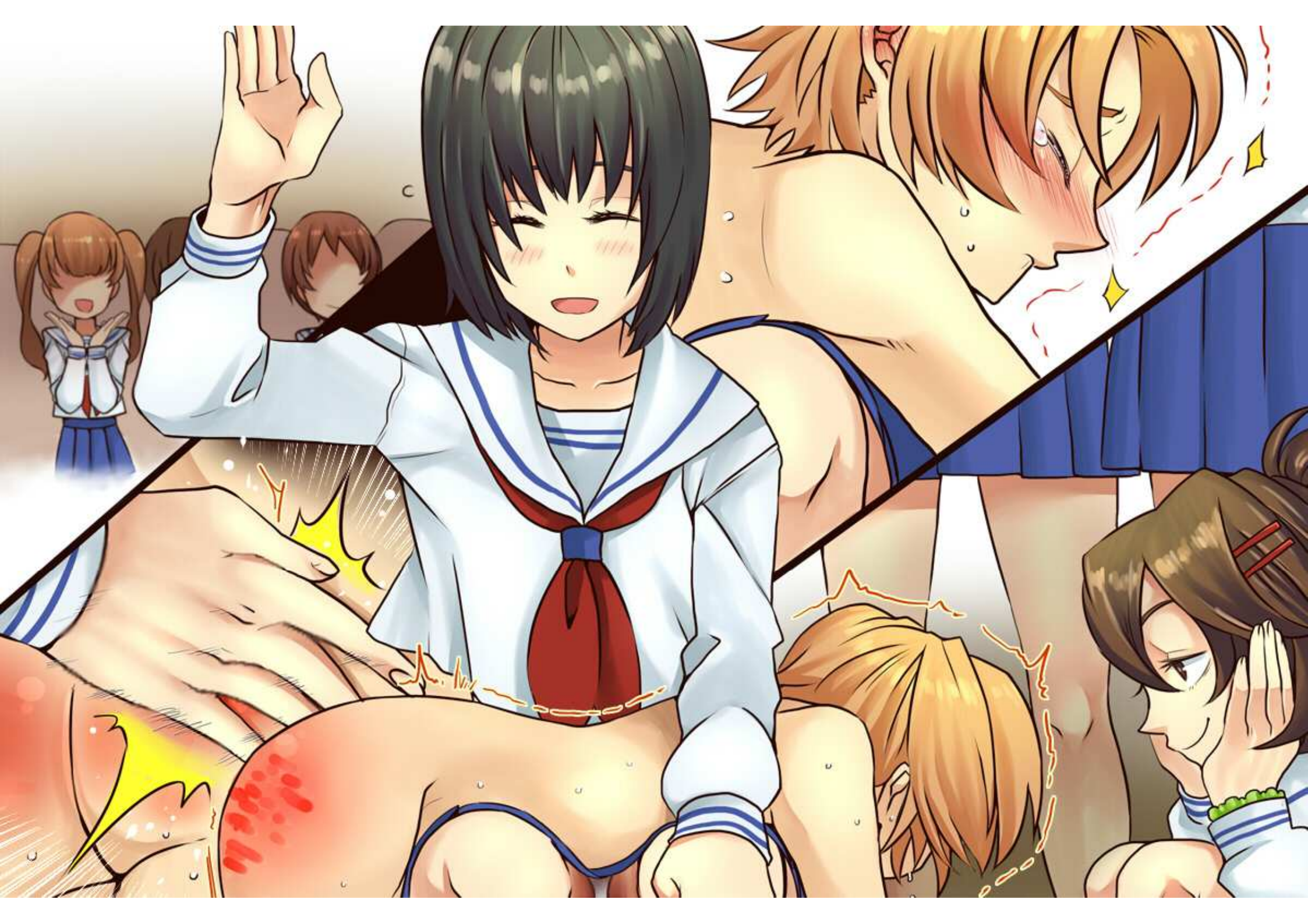
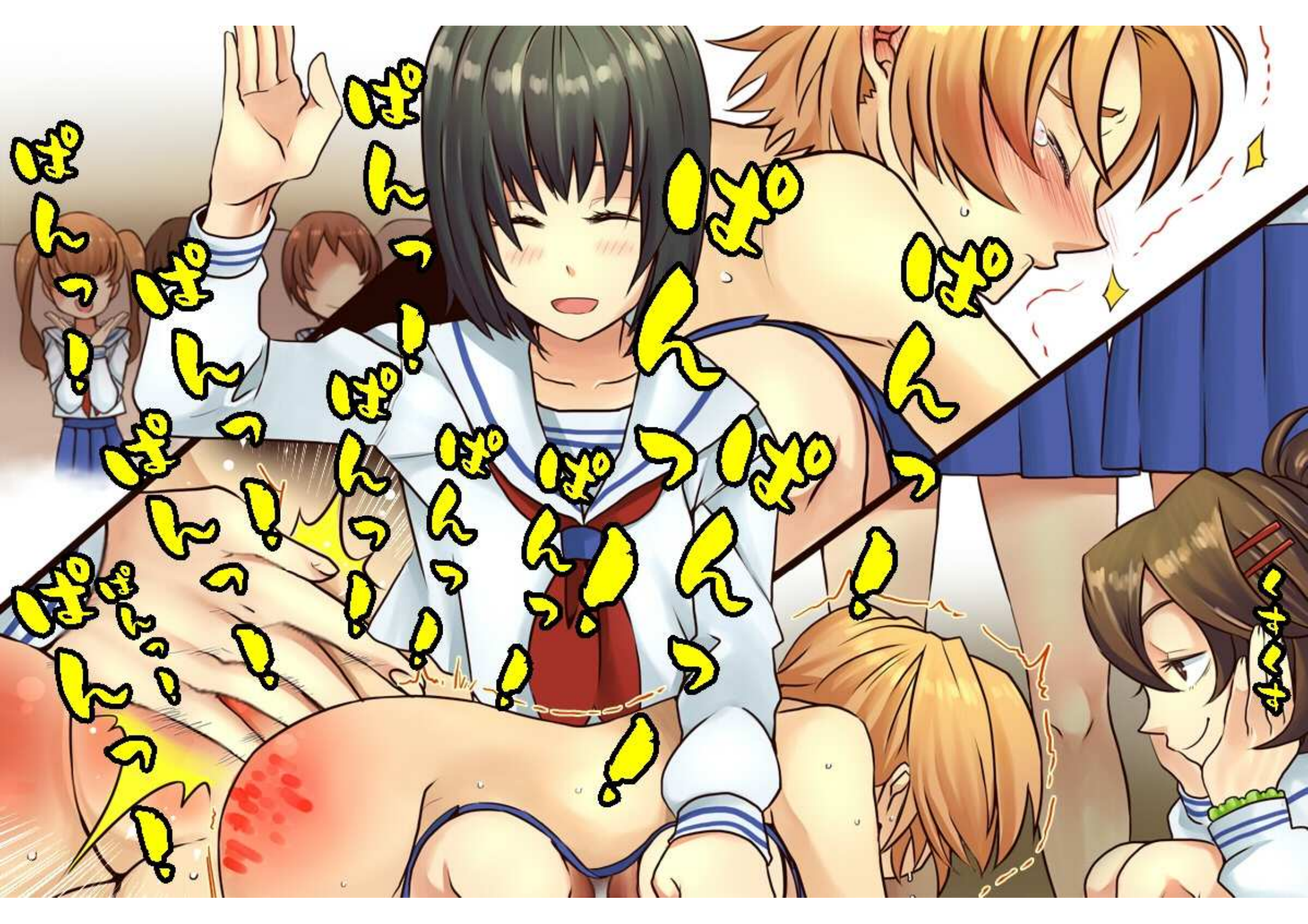


「へー？
ショウ君、ナナの言うことなら何でも聞くんだ？」
「違うよ。与えた屈辱を受け入れるだけ」
「んー？どう違うの？」
「命令はもちろん従ってもらうけど、
どんなことがあっても受け入れてもらうの。
服従だけなら、心の中では舌打ちしてるかもしれないし・・・」
「ははっ。そりゃショウ君も大変だ。
すごい人を好きになっちゃったね。
で・・・早速教室でお尻ペンペン？　マッパで？」

「そう！」
「ナナは厳しいね～。クスクス」
「じゃあ、始めるね。えいっ！」
「あ～あ～。
お尻いい音鳴ってるね。
恥ずかしいね～。
みんな見てるよ？」
ぱんっ！
ぱんっ！
ぱんっ！

「クスクス。女子が集まってきたよ。
皆、見てるよ。
期待に応えてもっとたくさん叩こうね」
「あれ？ショウ君？
ガクガク震えてるよ？」
ぱんっ！
ぱんっ！
ぱんっ！
ぱんっ！
ぱんっ！
ぱんっ！
ぱんっ！
ぱんっ！


ぱんっ
ぱんっ
ぱんっ

「・・・次が、最後の一発よ」
「ショウ君、凄いじゃん。
最後まで我慢出来たね」

パーンッ！
「おぐぅぅぅぅぅぅぅぅぅ！！」

嵐のようなお尻叩きの後、僕は我慢汁を垂らしたハダカのまま
ナナ様の命令で廊下に立たされた。

「アタシ、部活あるから終わるまでそのままで立っていてね」

代わる代わるいろんな女子が僕の真っ赤なお尻を見に来た。
辛かったし、恥ずかしかった。

でも・・・。

すごく感じてしまう僕がいた。